

共同研究プロジェクト紹介 多文化共生社会における日本語教育研究 サブプロジェクト：社会における相互行為としての「評価」研究 言語運用評価プロセスの多様性と普遍性をとらえる

著者	宇佐美 洋
雑誌名	国語研プロジェクトレビュー
巻	3
号	3
ページ	125-132
発行年	2013-03
URL	http://doi.org/10.15084/00000716

言語運用評価プロセスの多様性と普遍性をとらえる

Diversity and Universality of Processes in Evaluating Linguistic Performance

宇佐美 洋 (USAMI Yo)

1. はじめに

従来教育分野における「評価」とは、例えば教師のように権力を持つ者が、そうでない者の能力や習得の度合いを「一方的に値踏みする行為」、ととらえられてきた。こうした評価の結果は、被評価者の人生に対し少なからぬ影響を及ぼしてしまうため、教育分野における評価研究は、「いかにして公正性を確保していくか」という点に焦点があてられていた。

しかしながら評価を、「権力者による能力の値踏み」としてしかとらえないというのは極めて一面的な見方でしかない。「評価を行うのは権力を持つ側、受けるのは権力を持たない側」という常識をいったん取り払い、「社会に生きるひとはすべて、自らの価値観に従って、お互いを評価しあいながら生きている」という考え方に立った時、何が見えてくるか、どんな研究が可能となるか。「社会における相互行為としての「評価」研究」は、そのような問題意識に端を発している。

2. 「社会における相互行為としての「評価」研究」が目指すもの

本サブプロジェクトにおいては「評価」を、言語システムの習得の度合いを見極める手段、としてはとらえない。私たちは「評価」の定義として、「主体が持つ内的・暗黙的な価値観に基づいて、対象についての情報を収集し、主体なりの解釈を行った上で、価値判断を行うまでの一連の認知プロセス。またその結果として得られる判断」というものを採用する。言い換えるならば私たちは「評価」というものを、単に教育の成果や習得の度合いを測るための道具としてではなく、「人間が外の世界と接するときにはまず行う基本的認知活動」として広くとらえ直していることになる。

ではなぜ、そのようなとらえ直しが必要なのか。それは、現在われわれが暮らしている現代社会というものが、単一の言語・文化によって埋め尽くされた均質的なものではなく、異なる評価価値観がぶつかり合い、せめぎ合う場となっている、ということによる。

同一対象に接しているにもかかわらず、それに対する評価が人によってまったく異なる、という経験はだれもが持っていることだろう。それは人によって、評価の際に準拠する価値観が異なっているからと考えることができる。異なる価値観が生のままではぶつかり合い、何らのすりあわせも行われなければ、人間関係上深刻な摩擦が生じてしまう恐れが大きい。

もちろん、価値観そのものの間に優劣を論じることはできない。どのような価値観に準拠して評価を行うべきか、ということは決められないし、他者に対し、ある種の価値観で評価を行うよう仕向けるようなことは決してあってはならない。

では、異なる価値観のせめぎ合いの中で、円滑な人間関係を築いていくためには何が必要になるだろうか。そのための具体的処方箋として、筆者は以下のようなものを考えている。

- 1) 自分がどのような価値観に基づき、どのようなプロセスを経て他者の（あるいは自分の）言語運用を評価しているのかを内省・自覚すること。
- 2) 他者は自分とは異なる価値観に基づき、異なるプロセスによって評価を行っていることを理解し、それを尊重できるようになること。
- 3) 状況に合わせ、通常自らが準拠している評価価値観や評価プロセスを調整できるようになること。

私たちの最終目的は、日本社会で暮らすすべての成員が、上記のことをできるようになることを目指す教育プログラムを開発することである。そして、そうした教育プログラムの開発を支える理論的研究として、評価プロセスの多様性と普遍性とをともにとらえていくための研究を進めている。以下ではその一例として、日本語母語話者が非母語話者の言語運用を評価するという場面を取り上げて行った研究（宇佐美 2012）の一部を紹介する。

3. 評価プロセスの個別性と普遍性をとらえる試み

3.1 評価とは無限に多様なものか？

前述のように、同一の場面において同一の言語運用に接したとしても、その評価のあり方は人によって大きく異なるが、しかし「無限に多様」ということは決してないのではないか。ある場面における「評価の観点」は、重み付けに違いはあるにせよ、おそらくは有限個の範囲にとどまるはずである。

また評価とは、外界から得られた情報に対する認知的処理過程である。とすればその処理の手順には、論理的に条件付けられる一定の順序性が想定できるのではないか。

評価プロセスの多様性の中に何らかの「普遍性」を見出し、それをモデルの形で表現することができれば、「普遍的プロセス」との比較という形で「個別のプロセス」のありようもとらえやすくなるのではないだろうか。それが、筆者がまず設定した仮説であった。

3.2 調査の手順

そこで筆者はまず、「日本語母語話者が日本語非母語話者(学習者)の書いた謝罪文を読む」という条件を設定し、この条件の下で行われる評価のあり方が個人によっていかに異なっているかをとらえるために、以下のような手順で質的データを収集した。

- 1) 調査協力者となる 12 名の日本語母語話者¹に、日本語学習者が日本語で書いた謝罪文²10 編を読んでもらい、「いちばん感じがよいもの (1 位)」から「いちばん感じが悪いもの (10 位)」まで順位づけをしてもらう。順位づけの過程において思ったこと、感じたことは可能な限り口に出してもらって録音する (プロトコルの記録)。
- 2) 順位づけ作業終了後、「作業中どのようなことを感じたか、どのようなことが順位づけに影響を及ぼしたと思うか」という刺激文に基づいて連想語を自由に挙げてもらい、その連想語に基づき PAC 分析³ インタビューを実施する。

上記手順によって収集されたデータを文字化し、それぞれの協力者は「何に着目して評価を行っているのか」、「評価の対象に対し、どのような距離感をもって接しているのか」という観点から質的分析を進めていった。

3.3 評価プロセスにおける「一定の順序性」

得られたデータを詳細に検討したところ、12 名の協力者の評価プロセスは極めて多様なものであったが、しかしどの協力者の評価プロセスにも、以下に挙げる「一定の順序性」を見出すことができると思われた。

評価プロセスの基本的順序：

「情報収集」→「解釈」→「価値判断」

「解釈」の際、着目される対象の推移：

「文面そのもの」→「書き手」→「書き手と読み手との関係性」

この 2 種類の順序性について詳細に説明しよう。

書かれたものの評価を行う際、われわれは最初に、文章に何が書かれているかということをもまずは素直に読み取ろうとするだろう。これが「情報収集」である。次いでその情報に対し、評価者独自の認知的操作 (推論・予測・既有知識との結びつけ等) を行うことにより、文章には必ずしも明確に記載されていない情報を読み取ることもできる。これを「解釈」と呼ぶ。そして、文章から直接得られた情報や「解釈」を経て得られた情報を、自らが持つ価値観と照らし合わせて何らかの「価値判断」を行うことになる。このように考えるならば、「情報収集」「解釈」「価値判断」という 3 つの行程は、論理的因果関係により、この順番で順序づけられている⁴、ということになるだろう。

また「解釈」の際に着目される対象についても、論理的に順序づけられた推移が見られた。

¹ 12 名の調査協力者は、155 名の日本語母語話者に対する質問紙調査の結果をもとに、偏りがないように選定した。選定手順の詳細は宇佐美 (2010) 参照。

² 「ごみの出し方がよくない」というクレームの手紙に対する返答。

³ PAC 分析とは、内藤哲雄氏によって提案された、個人別態度構造 (Personal Attitude Construct) を分析するための心理学的手法のひとつである (内藤 2002)。

⁴ この順序づけは「論理的因果関係」を示すものであり、「時間的前後関係」を示すものでないことに注意。また同様のことは、次の「解釈」に関する順序づけにも当てはまる。

今回は文章を評価する、という状況であるので、「解釈」も、まずは「文面そのもの（記述内容・言語形式・文章構成など）」に対して行われることになる。一方、今回使用した文章の目的が「謝罪」であったため、協力者の「解釈」は、「文面そのもの」を超え、その背後にある「書き手」にまで及ぶことが非常に多かった。つまり、このような文章を書いた人というのは、どういう「態度」を示しており、どういう「能力」があり、どういう「状況」に置かれており、またどういう「人格」の持ち主なのか、などのことについての解釈である。

さらに、書き手についての解釈を行った上で、「書き手と読み手（＝自分・評価者）との関係性」について解釈が行われている事例も見られた。「書き手の行動によって問題が解決するか」、「書き手と自分とは、今後うまく付き合っていけそうか」等についての解釈である。

このように「解釈」の着目対象についても、「文面そのもの」→「書き手」→「書き手と読み手との関係性」という論理的に順序づけられた推移を見出すことができた。

3.4 評価プロセスモデルの作成

評価プロセスに関する質的データの分析により、評価プロセスにおける「一般的な行程」をつかむことができた。しかし当然のことながら現実の評価においては、こうした行程が常に逐一順序通り実行されるとは限らない。評価者によって、どの行程に重みづけを行うかは

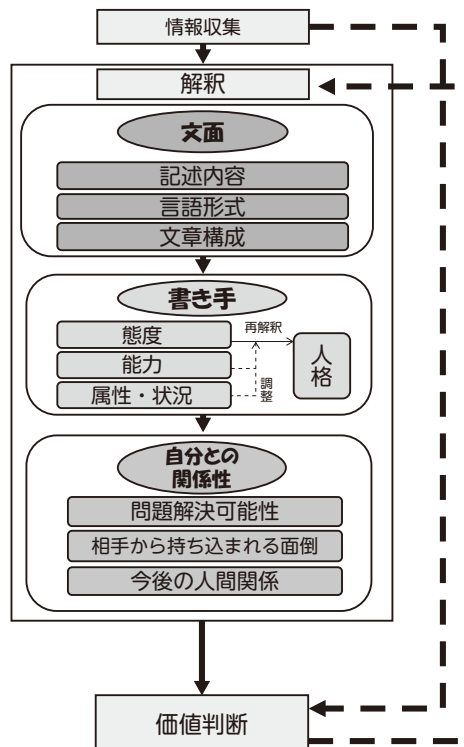


図1 日本語母語話者が学習者謝罪文を評価する際の評価プロセスモデル

かなり異なっている。また、ひとつの行程には複数の観点の関係しうる。評価者によって、各行程における観点のいずれに着目しやすいかには個人差があるものと考えられる。

このような考えに基づき筆者は、日本語母語話者が学習者の書いた謝罪文を評価する際の「評価プロセスモデル」を提案した(図1)。「評価プロセスモデル」とは、「想定しうる限りの評価行程・評価観点を、それらの間の順序性を含め、1枚の図として表現したもの」である(本稿で示すモデルは簡略版である。正式版は宇佐美(2012)を参照)。

図1において、太い実線で示されているのが評価の「基本的な流れ」であり、太い破線で示されているのが、評価において「あり得る流れ」である。「解釈」という行程内において、着目対象は「文面」→「書き手」→「書き手と読み手(=自分)」との関係性」というように推移していく。そして各着目対象の枠の中に、具体的な着目観点が挙げられている(図の各構成要素の説明については宇佐美2012で詳細に示されている)。

3.5 「評価プロセスモデル」の、個人の評価プロセスへのあてはめ

前述のように、「評価プロセスモデル」はあり得る評価行程・評価観点をすべて描きこんだものであり、前述のように現実の評価においては、これらすべての構成要素が登場するわけではない。とすれば評価者個人の評価プロセスは、「評価プロセスモデル」の一部を省略・

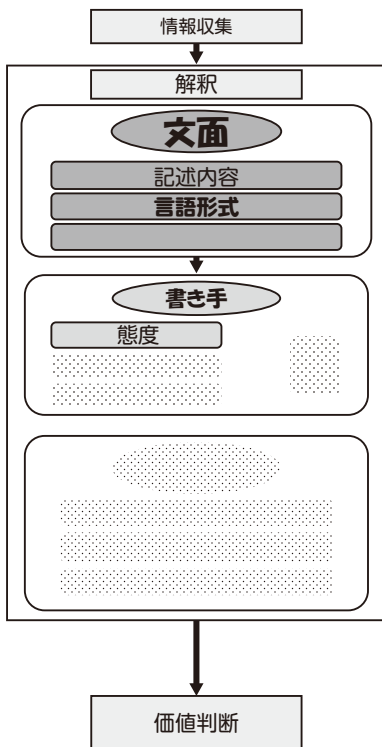


図2 HSc1氏評価プロセス図

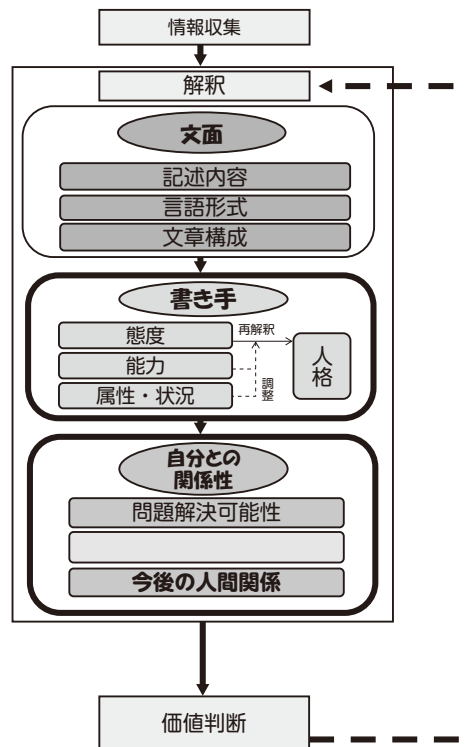


図3 MYt4氏評価プロセス図

簡略化したり、一部を強調したりすることによって表現することができるものと考えられる。

ではこの「評価プロセスモデル」により、実際の評価者の評価プロセスがどのように表現できるかを見ていこう。

まず、協力者の1人である HSc1 氏の評価プロセスを図2として示す。

この協力者の評価コメントは、そのほとんどが「文面（特に「言語形式）」に関するものであり、「書き手」、あるいは「自分との関係性」についての言及は極めて少なかった。ごく一部に「書き手」の「態度」（謝罪の気持ちがあるかどうか）に対する言及があったが、一方で「謝罪の気持ちがあるだけでは不十分。それが言語によって明確に表現され、相手に伝わって初めて意味を持つ」という意味の発言もあった。基本的には「言語形式」に対する着目が高く、それと関連させて「書き手の態度」にも多少の言及がなされているようである。

一方、MYt4氏は、多くの観点に対し（「相手から持ち込まれる面倒」以外のすべてについて）満遍なく着目しつつ評価を行っていた。MYt4氏の評価プロセス図を図3として挙げる。

MYt4氏は「解釈」の段階において、文面にも着目していたが、それは「書き手」や「自分との関係」について解釈を行うための手掛かりとしてであった。特に、「今後この人と仲良く付き合っていけそうか」ということについての言及が多く見られ、書き手と共感的な関係が築けるか、ということをも最も重視しているようであった。またこの協力者は、いったん「価値判断」を行ってから、「なぜ自分はそのような判断を行ったのだろうか」ということについての考察も行い（つまり、自分自身の評価価値観をも解釈の対象とし）、再び解釈を行い直す、というプロセスも示していた（図3の太い破線部分）。

紙幅の関係で本論では2名分の評価プロセス図しか示すことができなかったが、少なくとも今回の12名の協力者の評価プロセスについては、この「評価プロセスモデル」の書き換えによって適切に表現し得ることを宇佐美（2012）では確認済みである。評価プロセスの普遍性を個別性をモデルによってとらえる試みは、「謝罪文の評価」という場面においては相当程度成功したといえる。

4. これからの研究が目指すもの

こうした「評価プロセスモデル」は、自分自身が言語運用の評価を行う際、どのようなプロセスを経ているのか、ということの内省するための手掛かりとして極めて有効なものであると考えられる。今後はこうしたモデルも活用しつつ、一般社会人が自らの評価プロセスを内省し、他者の評価プロセスとの違いに自ら気づいていくことをうながす研修システムの開発を行っていく予定である。

● 参考文献 ●

- 内藤哲雄(2002)『PAC 分析実施法入門 [改訂版]』京都：ナカニシヤ出版。
- 宇佐美洋(2010)「文章の評価観点に基づく評価者グルーピングの試み—学習者が書いた日本語手紙文を対象として—」『日本語教育』147: 112-118.
- 宇佐美洋(2012)「学習者の日本語書きことばに対する母語話者評価の多様性に関する研究—謝罪文を対象とした「評価プロセスモデル」の構築—」博士論文, 名古屋外国語大学。

《要旨》 日常の社会生活において、他者の言語運用を評価する際、個人が準拠している価値観は人によって千差万別であり、このため同一の言語運用に接した時でも、その評価の結果は大きくばらついている。異なる言語的・文化的背景を持つ者同士が円滑な人間関係を作っていくようになるためには、自らが準拠する評価価値観のあり方を自覚すると同時に、他者の価値観を尊重できる態度が重要であり、そうした態度を養成するための教育システムの開発が求められている。本論ではそのための基礎研究のひとつとして、日本語母語話者が非母語話者の言語運用を評価するという場面を取り上げ、そこに見られる評価プロセスをモデル化して表現する、という試みを紹介した。

Abstract: When evaluating others' linguistic performances in their daily lives, individuals conform to very different norms that are related to their own personalities. Thus, even when considering the same linguistic performance, the evaluation can vary widely among different evaluators.

For individuals to develop good relationships with others from different linguistic and/or cultural backgrounds, it is important for them to (1) realize the kind of norms they conform to while evaluating others' linguistic performances and (2) respect the norms of others, which may be significantly different from their own.

The author is planning to develop a training system, the purpose of which is to foster the above-mentioned attitudes. This paper presents basic research which can serve as the theoretical basis of the training system. The author proposes an Evaluation Process Model which expresses both the diversity and the universality of evaluation processes that can be observed when native Japanese speakers evaluate letters of apology that are written in Japanese by non-native speakers.

宇佐美 洋 (うさみ・よう)

国立国語研究所日本語教育研究・情報センター准教授。博士(日本語学・日本語教育学)(名古屋外国語大学)。新潟大学専任講師, 国立国語研究所研究員, 同主任研究員, 同グループ長を経て, 2010年7月より現職。

主な著書・論文: 「文章の評価観点に基づく評価者グルーピングの試み—学習者が書いた日本語手紙文を対象として—」(『日本語教育』147, 2010), 「実行頻度からみた「外国人が日本で行う行動」の再分類—「生活のための日本語」全国調査から—」(『日本語教育』144, 2010)。

受賞: 第9回奨励賞(日本語教育学会, 2011), 第6回林大記念論文賞(日本語教育学会, 2011)。

社会活動: 日本語教育学会学会誌委員会委員, 同調査研究推進委員会委員, 社会言語科学会研究大会発表賞選考委員会委員, 日本語検定審議委員。

基幹型共同研究プロジェクト「多文化共生社会における日本語教育研究」

サブプロジェクト「社会における相互行為としての「評価」研究」

サブプロジェクトリーダー 宇佐美 洋

(国立国語研究所 日本語教育研究・情報センター 准教授)

プロジェクトの概要

現代社会においては、異なる言語的・文化的背景を持つ者同士が、互いの異なる価値観を尊重しあいながら生きていくことが求められる。本サブプロジェクトでは、異なる言語的・文化的背景を持つ者同士の多様な接触場面を取り上げ、そうした場面における言語運用・言語行動が、参加者双方によってどのように評価されているか、その実態をとらえるとともに、評価という認知過程がどのようなメカニズムによって行われているのかについて理論的な考察を行う。かつそこで得られた知見を、単なる「言語システムの指導・教育」を超えた、「人間同士のインターアクションについての学び」へと発展させていくための方法論の開発を行う。